

報告番号 甲 乙 第 号

汐崎 順子君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目 子ども文庫が生まれる理由、続ける力、支える仕組み

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	池谷 のぞみ
副査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	根本 彰
副査	慶應義塾大学名誉教授	田村 俊作
副査	筑波大学教授	吉田 右子
学識確認	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	池谷 のぞみ

論文要旨

本論文は、終戦後に女性、主に母親たちが個人の蔵書を近隣の子どもたちに家庭を解放することで豊かな読書環境を提供することから始まった「子ども文庫」を対象に、その生まれる理由、継続していく原動力、そしてこれを背後から支える仕組みについて解明したものである。子ども文庫の主催者と関係者が起点となって、児童書の出版、公立図書館の設置運動、2000年の読書推進法の法案へ連なる、子どもの読書環境を豊かにする大きな流れを作っていったことが明らかになった。

本論文は以下のように構成されている。

第I章 文庫研究の視点

- A. はじめに
 - B. 研究の目的と課題
 - C. 用語の整理
 - D. 文庫に関する研究、文庫調査
 - E. 研究課題、研究方法と論文の構成
- 注・引用文献
- 図表リスト

第II章 文庫のあゆみと原点

- A. 文庫のあゆみ：誕生から現在まで

- B. 文庫の誕生と活動：草創期の家庭文庫
- C. 文庫の原点、活動と認識の変化の道筋
- D. 土屋の文庫の意義

注・引用文献

図表リスト

第III章 運営と活動の現在：文庫への質問紙調査より（1）

- A. 調査の概要
- B. 運営と活動の現在

注・引用文献

図表リスト

第IV章 運営者の意識と文庫の継続：文庫への質問紙調査より（2）

- A. 運営者の意識
- B. 文庫の継続とその背景

注・引用文献

図表リスト

第V章 現在の文庫にみる継続・継承のさまざまな形

- A. 継続・継承のさまざまなパターン、引き継がれる要素
- B. まつお文庫：「個」としての活動を貫く家庭文庫
- C. まーしこ・むーしか文庫：「本」と「精神」を継承して生まれた文庫
- D. 汐見台文庫：地域の一読書施設として定着、継続する地域文庫
- E. はちのこ文庫・プーさん文庫・プーさん図書館：「分家」して活動する文庫
- F. 鉄ン子文庫：「分室」を単位に一つの共同体を形成する文庫
- G. 継続、継承に存在する二つの要素：「精神」と「運営の形」

注・引用文献

図表リスト

第VI章 文庫連絡会：文庫をつなぎ活動を広げる共同体

- A. 文庫連絡会とは
- B. 文庫連絡会のあゆみ
- C. 文庫連絡会の現在：文庫連絡会への質問紙調査より
- D. 文庫連絡会のこれから：幅広く子どもの読書推進を働きかける組織へ

注・引用文献

図表リスト

第VII章 東京子ども図書館：「文庫」から「図書館」へ

- A. 東京子ども図書館とは
- B. 石井桃子：「出版」から「文庫」、「図書館」へ
- C. 松岡享子：「図書館」から「東京子ども図書館」へ

D. 東京子ども図書館：「メタ文庫」、「メタ図書館」の役割を持つ私立児童図書館

注・引用文献

図表リスト

第Ⅷ章 「私」としての文庫の役割、社会の中の文庫

A. 現在の文庫と子どもの読書環境

B. 東日本大震災後の陸前高田市における文庫と図書館

C. 本研究における「問い」と知見

D. 生まれる理由、続ける力、支える仕組み、文庫の多様性と可能性

注・引用文献

図表リスト

引用文献リスト

付録

各章の概要

第Ⅰ章「文庫研究の視点」では、子ども文庫に関わる概念と用語を整理するとともに、子ども文庫に関わる先行研究を批判的に検討した上で、戦後の貧しい読書環境の中でいかにして子ども文庫というものが生まれ、そして現在の豊かな読書環境においても継続し、新たに生まれるのかを明らかにするという研究課題を提示した。具体的には研究課題 1 に文庫の設立、研究課題 2 に文庫の状況、研究課題 3 に文庫の継続、研究課題 4 に文庫の継続を支える仕組み「文庫はなぜ・どのようにして生まれたのか」を設定し、さらにこれらの研究課題を解明するための検討課題が設定されている。

第Ⅱ章「文庫のあゆみと原点」では、子ども文庫の原点を確認することを目指し、1950年代から現在までについて、四つの時代に区分して各時代における文庫の動きを概観した。その上で、1955年に世田谷の自宅に家庭文庫を開き、さらに1956年に読書環境という点では恵まれていなかった下町の入船町に協力者と共に文庫を開いた専業主婦の土屋滋子の活動を中心に取り上げることで、文庫の原点と位置づけられる時代の状況や運営者の動機と活動を明らかにした。土屋は2つ目の文庫を作ると共に、1957年に発足した家庭文庫研究会の一員としての活動し、また児童図書館研究会との交流を通して、子ども文庫の公益性を認識するに至ったことが示された。時代区分の仕方について、その理由に関わる議論については、より深めることもできた。

第Ⅲ章と第Ⅳ章では、2010年に実施した質問紙調査の結果（有効回答：528件）を分析した。第Ⅲ章「運営と活動の現在：質問紙調査より（1）」では、調査実施時点での子ども文庫の状況を提示した。文庫は数の上では減少していたが、1993年に日本図書館協会が実施した調査以降も活動の地域の変化はほとんどなく、長年にわたり活動を続

けている文庫が多かった。少数だが、新しい文庫が毎年各地に生まれていることも明らかになった。1993年の調査との比較では、家庭文庫の比率が増加していること、特に家庭文庫では施設や蔵書の充実の傾向が強いこと、新旧それぞれの文庫で運営者の高齢化と少人数化が進んでいることなどの変化がみられた。文庫を利用する子どもの数にも減少傾向がみられたが、一方で乳幼児と母親を含む、より幅広い年代が文庫を利用していることがわかった。

第IV章「文庫の変化と運営者の意識：質問紙調査より（2）」の前半（A節）では、文庫の継続に関する運営者の意識を中心に検討した。B節では、質問紙調査の自由記述から、回答した各文庫の運営者がなぜ、どのように継続しているのか、運営者が文庫を継続させるためにどのように取り組んでいるのかなどが書かれたものを提示した。質問紙調査の自由回答の内容に拠って議論が進められているため、活動に積極的な運営者の見解が前面に押し出されている傾向がある。

第V章「現在の文庫にみる継続・継承の多様性から」では、第IV章の結果を受けて、子ども文庫の継続の形を六つの事例を整理し、文庫活動の根幹をなす「場所」「蔵書」「運営の精神」がそれぞれの事例においてどのように継続・継承されているのかを示した。

第VI章と第七章では、文庫活動を支える仕組みを取り上げ、考察した。第VI章「文庫連絡会」では、文庫をつなぎ活動を広げる共同体として「文庫連絡会」を位置づけ、その主たる機能ならびに役割として、地域の文庫に携わる人たちの交流と学習、行政や社会へ働きかけることがあるとした。その上で、2010年に文庫連絡会に実施した質問紙調査（有効回答は88件）の結果を提示した。さらに日本図書館協会が1987年に実施した全国的な文庫連絡会の調査結果との比較も行なった。現在、文庫連絡会の数は減少し、新しく発足するものはほとんどみられない。一方で、都道府県規模の広域を対象とする文庫連絡会が増えている様子もみられた。こうした広域をカバーする文庫連絡会の構成、活動内容などをみると、文庫に限らず読み聞かせの実践グループ、個人ボランティアなども広く会員の対象としていた。現在の文庫連絡会はさまざまな読書推進活動と一体となり、文庫そのものをつなぐ組織ではなくなりつつあることが示されている。

その活動も、会員構成の変化に伴い当初の文庫の充実と発展を目的とするものから、より広い視点から地域の読書活動を推進させるものへと変容、変質しつつあることが明らかとなった。

第七章「東京子ども図書館」では、1974年に四つの家庭文庫（土屋滋子の土屋児童文庫、入舟町土屋児童文庫、石井桃子のかつら文庫、松岡享子の松の実文庫）を統合し、財団法人として設立した東京子ども図書館の設立経緯とその後の活動を明らかにしている。設立当初の一人である松岡享子氏から多くの資料の提供を受け、さらに長時間の聞き取りに基づき、東京子ども図書館がいかにして文庫運営のモデルを示し、活動に社会的価値を与え、運営者の精神的な拠り所になったのかが説得力を持って示されている。

第Ⅷ章「現在の子どもの読書環境と文庫」では、本論文で得られた知見を総括している。現在も文庫は続き、文庫を支える仕組みがあり、もし新たに文庫を始めようと思えばそれを実現させる道筋が示される状況にある。さらに子どもにとっての読書の意義、価値観が社会的に共有され、その環境を改善し整備・充実させることが社会の責任であるという認識が一般化している。そうした現代において東日本大震災が起き、その直後岩手県陸前高田市に生まれた三つの民間による読書施設を取り上げ、それらの成り立ちを分析することを通じて、地元と全国の文庫活動の関係者、東京子ども図書館、出版関係者、地元の宗教関係者など、子どもの読書環境を重要なものとして位置づける様々な国内外の人たちのつながりと意思が形になったものであることを示している。

審査内容

2019年4月26日午後1時より3時に、三田キャンパス研究室棟第一会議室において汐崎君と審査員4名で論文審査が行われた。

本論文は戦後に誕生した私的かつ自発的な活動である「子ども文庫」に焦点をあてている。「子ども文庫」とは、民間の人びとが、主として子どものために一定の場所を確保して本を集め、提供する活動を行なうこと、さらにその活動を行なう子どものための私設の読書施設のことである。そもそも「文庫」というものは、私的に本を集める営為によってつくられたもののことである。文庫というと、通常は文筆家や研究者、文化人と呼ばれる業績があった人が亡くなった後に、残された蔵書等資料類を一括して保存・運用されたものを指すことが多い。文庫は後に公的な図書館に組み替えられたり、吸収されたり、図書館の（特別）コレクションの一部となる場合もある。しかし子ども文庫の場合には、その多くは運営者自身の家庭の個人蔵書から始まる。主催者自身の子どもや近隣の子どもが大きくなってもそのまま継続されることが少なくない。蔵書は後に、意思を共有する別の運営者に引き継がれることもある。また自治会などの一角に設置され、複数の人たちで共同に運営される場合もあり、それらは家庭文庫と区別されて地域文庫と呼ばれる。

本研究は、「子ども文庫」を対象に、その生まれる理由、継続していく原動力、そしてこれを背後から支える仕組みについて明らかにすることを研究目的としている。戦後の子どもの読書環境が貧しい時期に、子ども文庫はピーク時には公共図書館の数よりも多く存在し、地域社会で実質的に「公共図書館」の役割を果たしていた。それにもかかわらず、これまで子ども文庫を対象として包括的に扱った研究は存在せず、本論文はそうした研究のまさに最初のものとして位置づけられる。

「子ども文庫」の設立と存続の理由を明らかにする目的を達成するために、本研究は研究課題1に文庫の設立、研究課題2に文庫の状況、研究課題3に文庫の継続、研究課

題4に文庫の継続を支える仕組み「文庫はなぜ・どのようにして生まれたのか」と四つの研究課題を設定した。それぞれの課題を検討するために三つの質問紙調査を実施することで現在の文庫の状況、文庫運営者の意識と継続の様子、文庫の運営者の交流と学習を支える文庫連絡会の活動の状況を明らかにしている。さらに全国の文庫運営者、ならびに文庫を支えてきた東京子ども図書館の創設者松岡享子を中心に聞き取り調査を実施すると共に、それぞれの活動や証言を裏づける資料を収集している。このように、独自に収集し入手した豊富なデータや資料に基づきながら各研究課題の検討を行ない、子ども文庫に関わる緻密でオリジナリティのある議論を提示するのに成功している。子ども文庫は、全国的に広く散在し、私的な活動であるためにその実態を把握することが難しい。このことを踏まえると、子ども文庫を初めて包括的になおかつ実証的に論じること成功した研究として、今後の子ども文庫研究の基本テキストになることは容易に予測できる。

以下、具体的に本研究の価値を挙げていく。第一に子ども文庫が、本を媒介とした母親と子供のコミュニケーションの場の提供と、同時に子どもたちの読書習慣を身につけるカルチャーの普及を進める運動としての側面も持っていたこと明らかにしたことにある。本研究は、子どもが本を自由に手にとり、その場で読んだり、借り出したりするだけでなく、読み聞かせ、紙芝居、手作り遊びなど多彩な活動も繰り広げられる活動の場としての子ども文庫の実態を示すこと通じて、子ども文庫が近隣の親子が共に過ごせる「本のある空間」であり、また後には読書の推進や図書館設置運動などにもつながっていったことを鮮やかに描いた。このことにより本研究は子ども文庫の、読書に関わるカルチャーを普及させる媒体並びに運動としての側面についても浮かび上がらせたという点で、公共的空間と本と人びとの関係性を論じる上で今後参照すべき重要なテキストの一つとなることは間違いない。

第二に子ども文庫の活動が、極めて複合的なつながりと広がりを持って子どもの読書環境に作用していったことを明らかにしたことにある。文庫は地域的な広がりを持ち、共同で運営する地域文庫や文庫連絡会で互いに支え合う動きにもつながり、さらに東京子ども図書館の設立者の一人である児童書の編集者石井桃子の働きもあって作家や児童書出版社と関わりを持った。さらに慶應義塾大学文学部図書館学科を卒業後米国に留学し、米国の公立図書館での勤務経験を経た松岡享子が、日本の公立図書館の児童サービス担当者の結束に大きく貢献したことを、新たな資料や本人への聞き取りにより明らかにした点は高く評価できる。

第三に子ども文庫連絡会が公立図書館の設置運動に深く関わり、現在は地域の多様な読書活動と結びついている点を解明し、公共図書館が多く設置された後にも、子ども文庫はそうした公共機関の制度に回収されることなく独自の公的領域を形成し、継続し続けたことを、本研究は鮮やかに描き出した。結果として、本研究は「私的な活動」と「公的な活動」の多様な関係性を検討する上で、豊かな材料を提供するものとして子ども文

庫が位置づけられることを明らかにしたということもできる。たとえば最近の、公立図書館のない発展途上国における日本の文庫活動的な動き、英国での公立図書館の閉鎖に伴う市民による図書館の運営、日本各地のマイクロライブラリーの動きなどを考察する上で、本研究は多くの示唆を与えることを約束するものである。

以上述べてきた点は、必ずしもすべてが論文の中で明示的に意図されて提示されたものではないが、それは子ども文庫の生まれる理由、存続の状況と理由を明らかにするという論文の目的を遂行するために一貫して議論を進めたことによるものと見なせる。結果的に、設定した目的および個々の研究課題に対する解を明白に提示することに成功しているだけでなく、すでに述べた複数の側面にわたり子ども文庫が考察可能であることを示すことにも成功していることは高い評価に値する。

しかしながら本研究には限界も少なからず指摘できる。第一に、第V章「現在の文庫にみる継続・継承の多様性から」が、文庫の現状を扱う直前の二つの章をさらに発展させて分析を提示する章だとすると、分析視点「蔵書」、「場所」、「精神」に関して、それぞれの文庫における位置づけを示した上で、これらの概念が文庫に対して持つ意味合いを掘り下げて議論できる可能性があったのではないかと思われる。文庫の継続性を重視しすぎたがゆえに、やや表層的な議論に留まっている。

第二に、文庫を支える仕組みとして文庫連絡会（第VI章）と東京子ども図書館（第VII章）を選択することにより、子ども文庫の歴史を一貫したストーリーで説明することを可能にしてはいるが、中心的な役割を担ってきた組織の動きが前面に出された議論になっている点である。文庫連絡会は、私設であるがゆえにつながりを持ちにくかった子ども文庫をつなぐことで文庫の体制の強靱化に貢献した。東京子ども図書館はブックリストの発行や研修等、人的支援を長期にわたって安定的に行なうことで、子ども文庫の中核にある読書活動を、理念と実践から支えた。文庫を支える仕組みとして両者を分析対象として選択したことは妥当であり、精緻な分析によって両者の実態と子ども文庫への影響が実証的に解明されている。一方、結果的には後景に置かれてしまった、文庫連絡会や東京子ども図書館とは距離を置いた文庫については、その実態分析と子ども文庫の複層的性質の解明が、今後の課題として残されている。

最後に、最終章で東日本大震災直後の陸前高田市において三つの読書施設が地元と全国の文庫関係者と宗教団体、児童出版関係者らの支援によって作られたことを扱っている。これらの自発的読書支援および図書館設置活動と子ども文庫活動を重ね合わせて、子どもの読書空間の生成を視野に入れつつ本研究全体を総括しようとする意欲的試みは、高く評価することができる。第V章の文庫の運営形態、継続・継承の分析との接続が明確に示されていればさらに説得力が増していたと思われる。

こうした本研究の限界は、子ども文庫が本研究において初めて学術的对象として分析された結果、見えてきた課題群であると言える。子どもの公共的読書空間を総合的に明らかにするための、アカデミックな可能性が示されたことは、本研究のきわめて重要な

学術的貢献としてみなすことができる。

よって審査員一同は、本研究が博士の学位授与にふさわしいものであると判断し、ここにご報告いたします。

以上